

平安文學における「荒れたる宿」考

— 『堤中納言物語』 「花櫻折る少將」を起點として —

李美淑*

目次

- はじめに — 傳統と創作との狭間 —
一 「荒れたる宿」の姫君
二 春の月夜の「花櫻」
おわりに
-

はじめに — 傳統と創作との狭間 —

『堤中納言物語』¹⁾は、先行研究において「ほとんど全てと言って良いほどに、『源氏物語』を始めとするプレテキストからの影響が指摘されている」²⁾と言われる程、先行する作品に大いに影響された物語である。この作品に収録されている十篇の短篇物語のうち、特に「花櫻折る少將」は、『源氏物語』蓬生卷などを連想させ、『源氏物語』のパロディーとして筆を進める意圖が見られる³⁾という言及からも分かる通り、『源氏物語』を始めとしてその他『伊勢物語』『落窪物語』などの先行する作品との関わりが多く指摘されている。⁴⁾

* 韓国外國語大學校 講師 日本古典文學

- 1) 『堤中納言物語』本文の引用は、塚原鐵雄校注『堤中納言物語』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八三年一月)により、括弧内に頁数を記した。
- 2) 阿部好臣「引用のモザイクからの挑戦—花櫻折る少將と王權物語—」(『堤中納言物語の視界』、新典社、一九九八年五月)二九三頁。
- 3) 稻賀敬二他校注・譯『落窪物語堤中納言物語』(日本古典文學全集十、小學館、一九七二年八月)四二五頁。
- 4) また、成立年代が不確かなため、影響の授受關係に論が分かれてはいるが、「花櫻折る少將」と『狭衣物語』との関わりも多く指摘されている。「花櫻折る少將」が『狭衣物語』に影響を與えたという見解は、岡一男「堤中納言物語とその心理分析」(『古典と作家』、文林堂雙魚房、一九四三年七月)を始め、土岐武治の「『花櫻折る少將』と狭衣物語との交渉」(『論究日本文學』第二十號、一九六三年三月)、「堤中納言と狭衣との典據關係—逢坂越えぬ權中納言・花櫻折る少將を取上げて—」(『立命館

「花櫻折る少將」に関する先行研究を検討してみると、先行する作品との関わりは具體的な表現の類似を指摘するものもあるが、主にこの物語を構成する話型(話のタイプ)の類似からその受容関係を指摘する論が多いように思われる。つまり、男君側が姫君を拉致する話に見られる所謂「姫君掠奪譚」と、結末部分における色好みの失敗譚に注目した所謂「をこ譚」がそれである。前者の立場は塚原鐵雄(『集成』・二十頁)の言及⁵⁾から、後者の立場は三角洋一の言及⁶⁾から確認することができる。

しかし、「花櫻折る少將」を讀んでいくと、先行研究において觸れられているこれらの指摘の他に、「昔物語」の傳統に基づく、男女の戀の一形態、典型的な一つのパターンを讀み取ることができると思われる。その際、手がかりになるのが次の記述に見られる「櫻多くて荒れたる宿」という表現である。

【場面I】

この方の人びと、召し出でて、さまざま、うち合はせつつ遊びたまふ。光季、「いかが女の、めでたてまつらざらむ。近衛の御門わたりにこそ、めでたく弾く人あれ。何ごとにも、いとゆゑづきてぞ見ゆる」と、おのがどち、言ふを聞きたまひて、「いづれ。この、**櫻多くて荒れたる宿**、風は、いかでか見し。われに聞かせよ」と宣へば、「なほ、たよりありて、まかりたりしになむ」と申せば、「さる所は、見しぞ。こまかに語れ」と宣ふ。
(二十七~二十八頁)

琵琶を弾きつつ遊びに興じていた時、側近の光季から琵琶に長けている女君の話に耳にした男君が、その姫君の住まいを指すのに用いられた「櫻多くて荒れたる宿」という表現がそれである。

この物語において、姫君の住居が「荒れたる宿」と語られるのは、「築地の崩れ」(二十一頁)、「あはれげに荒れ、人げなき所」(二十二頁)、「透垣のつらなるむら薄の繁きした」(二十三頁)などに描寫されているように、手入れの届いていない宿の様子によるものであるが、このような宿の現状は、その家にしっかりした後見がないことを表している。そして、「荒れたる宿」の姫君が「まことにをかしげにぞはべる」(「故源中納言のむすめ」(二十八

文學』第三三八・三三九號、一九七三年九月)に見られる。一方、『狹衣物語』が「花櫻折る少將」に影響を及ぼしたという見解は、土岐武治の初期の論文である「『花櫻折る少將』考」(『平安文學研究』第一輯、一九四九年九月)や、川端春枝「月に紛う花—花櫻折る中將考—」(『國語國文』一九九三年七月號)などから確認できる。

5) 塚原のこのような見解は、『王朝の文學と方法』(風間書房、一九七一年一月、一一〇~一一二頁)に詳しく述べられており、「花櫻折る少將の方法—姫君掠奪の史的展開—」(『二松學舎大學人文論叢』第四十八輯、一九九二年三月)など保科恵の一連の論文に受け継がれている。

6) 三角洋一『堤中納言物語全譯注』(講談社學術文庫、講談社、一九八一年十月)三十八頁。

頁)であり、「をち」である大將の養女として入内を控えているという身の上の設定は、「今」は落ちぶれた境遇であるが、「昔」は親に大事に育てられた姫君として、これから入内して帝の寵愛を受ける可能性のあることを窺わせる。

なお、この物語の主なプロットは、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」と考えられるが、このような戀のパターンは「花櫻折る少將」に限って見られるものではなく、『源氏物語』を始めとした先行する作品において定型化された設定であるように思われる。しかし、このことが、「花櫻折る少將」という一物語の獨自性を否定することには繋がらないと思う。というのは、この物語は、ぎりぎりの線において先行する作品の模倣から離れていると読み取られるからである。

そこで、本稿では、先ず「花櫻折る少將」以前の作品(または同時代と推定される作品)における「荒れたる宿」の用いられ方を検討し、それがこの物語にどのように受容されているのかについて確認した後、それらの先行する作品と弁別されるこの物語の新しさを、「荒れたる宿」に咲き亂れた「花櫻」に着目して考えてみる。

一 「荒れたる宿」の姫君

(一) 和歌における「荒れたる～」の用例

では、「花櫻折る少將」に先行する作品における「荒れたる宿」の用例を通して、その用いられ方を検討してみよう。用例の収集にあたっては、「荒れたる宿」の他、「荒れたる+場を表す名詞」にまで範囲を広げて調べてみることにする。

先ず、歌における歌ことばの用例であるが、『萬葉集』及び八代集を対象にして調べてみた結果、『萬葉集』(二例)、『古今和歌集』(一例)、『後撰和歌集』(二例)、『拾遺和歌集』(一例)、『後拾遺和歌集』(四例)、『詞花和歌集』(一例)、『新古今和歌集』(五例)から用例を確認することができた。⁷⁾

『萬葉集』⁸⁾における用例は、次のようである。

① 樂浪の 國つ御神の うらさびて **荒れたる京** 見れば悲しも (卷第一・三十三)

7) 「花櫻折る少將」の成立時期に關しては、未だ見解が分かれているが、「十一世紀後半説」が廣く支持されているようである。従って、一〇八六年頃の編纂と推定される『後拾遺和歌集』以降は調査の対象外になるが、参考のために検討してみることにした。なお、『金葉和歌集』『千載和歌集』からは用例が見当たらなかった。

8) 『萬葉集』の引用は、小島憲之他校注・譯『萬葉集①』(新編日本古典文學全集六、小學館、一九九四年五月)による。括弧内に卷數・歌番號を記した。

② 都なる 荒れたる家に ひとり寝ば 旅にまさりて 苦しかるべし (巻第三・四四〇)

「樂浪の～」の歌は、高市という人が古都である近江を見て詠んだ歌であり、②の「荒れたる家」とは、新全集の頭注によれば、「妻がいなくなった奈良の家」を指しているのであって、『萬葉集』の歌二首における「荒れたる～」の歌ことばは、男女の戀の背景としては用いられていない。

また、八代集における用例は、全部で十四例ある。

③ ものへまかりけるに、人の家に女郎花植へたりけるを見て、よめる 兼覽王
をみなへし後めたくも見ゆる哉あれたるやどにひとりたてれば

(『古今和歌集』・巻第四・秋歌上・二三七)⁹⁾

④ 住まぬ家にまで来て紅葉に書いて言ひつかはしける 枇杷左大臣
人住まず荒れたるやどを来て見れば今ぞ木の葉は錦織りける

(『後撰和歌集』・巻第八・冬・四五八)¹⁰⁾

⑤ 三條右大臣身まかりて翌年の春、大臣召しありと聞きて、齋宮のみこにつかはしける むすめの女御

いかでかの年ぎりもせぬ種も哉荒れたるやどに植へて見るべく

(『後撰和歌集』・巻第十五・雜一・一一〇九)

⑥ 中宮の内におはしましける時、月の明かき夜、歌詠み侍ける 善滋爲政
九重の内だに明かき月影に荒れたる宿を思こそやれ

(『拾遺和歌集』・巻第十七・雜秋・一一〇五)¹¹⁾

『古今和歌集』の「をみなへし～」の歌は、「荒れたる宿」に咲いている女郎花を見て、「女郎花」＝「女」という發想から、そこに住む女主人に思いを寄せる歌であるが、記されている詞書だけでは、その後の展開を読み取ることはできない。ただ、「荒れたる宿に住んでいる女」が男の心を引きつける対象として歌に詠まれたのは、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」という戀のパターンの下敷きになっているようで興味深い。④の歌には、昔の女の不在を詠むのに「荒れたる宿」が用いられており、また「いかでかの～」

9) 『古今和歌集』の引用は、小島憲之・新井榮藏校注『古今和歌集』(新日本古典文學大系五、岩波書店、一九八九年二月)による。括弧内に巻數・部立て・歌番號を記した。

以下、八代集においては、同じ。

10) 『後撰和歌集』の引用は、片桐洋一校注『後撰和歌集』(新日本古典文學大系六、岩波書店、一九九〇年四月)による。

11) 『拾遺和歌集』の引用は、小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(新日本古典文學大系七、岩波書店、一九九〇年一月)による。

の歌は、能子が父藤原定方の死を追慕する歌であって、ここにおける「荒れたるやど」も男女の出会いの場面とは無関係である。『拾遺和歌集』の歌も、新大系の注に、「月に寄せて、宮殿と我が家を對比させ、中宮を賛美する」ものとなっており、男女の戀とは無関係のようである。

- ⑦ 題しらず 源時綱
君なくて荒れたる宿の淺茅生にうつら鳴くなり秋の夕暮
(『後拾遺和歌集』・卷第四・秋上・三〇二)12)
- ⑧ 月の夜、中納言定頼がもとにつかはしける 彈正尹清仁親王
板間あらみあれたる宿のさびしきは心にもあらぬ月を見るかな
(『後拾遺和歌集』・卷第十五・雜一・八四六)
- ⑨ 月明くはべりける夜、半蔀に女どもの立ちて侍けるを、男、まいらむなど言ひ入れ
させて侍ければよめる よみ人しらず
たれとてか荒れたる宿といひながら月よりほかの人を入れるべき
(『後拾遺和歌集』・卷第十五・雜一・八六四)
- ⑩ 陸奥にまかりくだりけるに、信夫の郡といふ所に早う見し人を尋ねければ、その
人なくなりけり聞きて 能因法師
あさち原荒れたる宿はむかし見し人をしのぶのわたりなりけり
(『後拾遺和歌集』・卷第十五・雜一・八九三)
- ⑪ 筑紫より歸りまうできて、もと住み侍けるところのありしにもあらず荒れにけるに、
月のいと明く侍ければよめる 帥前内大臣
つれごとあれたる宿をながむれば月ばかりこそむかしなりけれ
(『詞花和歌集』・卷第九・雜上・三〇八)13)

⑦～⑪の用例のうち、『後拾遺和歌集』の⑧の歌は、男に贈った男の歌であって、ここにおける「あれたる宿」も男女の戀とは関係がない。⑦の歌は、『後撰和歌集』の④の歌と同じく、昔の女の不在を詠んだものであり、⑩の「あさち原～」の歌は新大系の注によれば、「ゆかりの地でなき人を偲ぶ歌」となっている。また、⑪の歌も昔住んでいた家に歸って自分の永かった不在をしみじみと思うものであって、「荒れたる宿」という歌ことばが人の不在を表す表現として多く用いられているのが分かる。しかし、⑨の「たれとてか～」の歌

12) 『後拾遺和歌集』の引用は、久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』(新日本古典文學大系八、岩波書店、一九九四年四月)による。

13) 『詞花和歌集』の引用は、柏木由夫・工藤重矩校注『金葉和歌集詞花和歌集』(新日本古典文學大系九、岩波書店、一九八九年九月)による。

は、新大系の注によれば、「好色めいた男の振舞いを拒絶する女の歌」として、その家が実際荒廢したかどうかは確認できないが、男女の出会いの場面に「荒れたる宿」という表現が用いられたという点は、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」という戀のパターンの形成を考えると、示唆的である。

- ⑫ 思ふこと侍けるころ、初雪ふり侍ける日 紫式部
ふればかく憂さのみまさる世をしらで荒れたる庭につもる初雪
(『新古今和歌集』・卷第六・冬歌・六六一)14
- ⑬ 題しらず 安法法師女
獨りふすあれたる宿の床の上にあはれいく夜の寢覺めしつらん
(『新古今和歌集』・卷第十三・戀歌三・一二一七)
- ⑭ 山里にて、月の夜都を思ふといへる心をよみ侍ける 大江嘉言
宮こなるあれたる宿にむなしくや月にたづぬる人歸るらん
(『新古今和歌集』・卷第十六・雜歌上・一五四四)
- ⑮ 西院辺に早うあひ知れりける人を尋ね侍けるに、すみれ摘みける女、知らぬよし
申ければ、よみ侍ける 能因法師
いそのかみふりにし人を尋ぬれば荒れたる宿にすみれ摘みけり
(『新古今和歌集』・卷第十七・雜歌中・一六八四)
- ⑯ 主なき宿を 惠慶法師
いにしへを思ひやりてぞこひわたる荒れたる宿の苔の石橋
(『新古今和歌集』・卷第十七・雜歌中・一六八五)

『新古今和歌集』の五首の歌のうち、⑫と⑭の歌における「荒れたる～」は、自分の家を表すものとして男女の出会いの空間とは程遠い。なお、⑬の歌は戀歌ではあるものの、この「あれたる宿」が男女の出会う時の舞臺になっているとは讀めない。また、⑮と⑯の歌における「荒れたる宿」は、④⑦⑩の歌と同じく、昔の人の不在を際立たせる歌ことばであると思われる。

結局、歌における「荒れたる～」は、自分や戀人、知人などの不在の状態を表す歌ことばとして多く用いられており、男女の戀における舞臺装置としての可能性を持つものは、『新古今和歌集』の③の歌と『後拾遺和歌集』の⑨の歌しかないことが分かる。

14) 『新古今和歌集』の引用は、田中裕校注『新古今和歌集』(新日本古典文學大系十一、岩波書店、一九九二年一月)による。

(二) 散文における「荒れたる～」の用例

次に、散作文學に用いられた「荒れたる～」の用例であるが、日記・隨筆・物語(歌物語・作り物語)を対象にして検討してみる。15) 先ず、『源氏物語』以前の作品における用例を見てみよう。

- (1) むかし、心つきて色好みなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり。(中略)この男、
むぐら生ひて**荒れたる宿**のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり
とてなむいだしたりける。(『伊勢物語』・五十八段 16)
- (2) 故式部卿の宮、二條の御息所に絶えたまひて、またの年の正月の七日の日、若菜奉りたまうけるに、
ふるさとと**荒れにし宿**の草の葉も君がためとぞまつはつみける
とありけり。(『大和物語』・十八段)
- (3) 良岑の宗貞の少將、ものへゆく道に、五條わたりにて、雨いたう降りければ、**荒れたる門**に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。歩み入りて見れば、階の間に**梅**いとをかしよう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆるが、
よもぎ生ひて**荒れたる宿**をうぐひすの人來と鳴くやたれとか待たむ
とひとりごつ。(『大和物語』・一七三段)
- (4) さて、この男、その年の秋、西の京極、九條のほどにいきけり。そのあたりに、築地など崩れたるが、さすがに葎など上げて、簾かけ渡してある人の家あり。(中略)築地の崩れより見いだして、この女、
人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬ
と書きて、いだしけれど、もの書くべき具、さらになかりければ、ただ、口移しに、男、
誰があきにあひて**荒れたる宿**ならむわれだに庭の草は生さじ
といひて、(後略) (『平中物語』・三十六段)

これらの歌物語の用例のうち、(1)の『伊勢物語』五十八段の「荒れたる宿」は、男女の歌のやり取りの中に用いられた歌ことばではあるが、その宿が男の家を指しており、「荒れた

15) 日記・隨筆における「荒れたる～」の用例は、『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『枕草子』を対象にして調べたものである。物語における「荒れたる～」の用例は、『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寢覺』を対象にして調べてみた。

16) 歌物語の引用は、福井貞他校注・譯『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』(新編日本古典文學全集十二、小學館、一九九四年十二月)による。

る宿の姫君」という設定とは逆である。また、(2)の『大和物語』十八段の「荒れにし宿」は、「人の不在」を表す歌の用いられ方と類似しているが、久しく訪ねてこない男に贈った女の歌に用いられ、後で検討する女流日記における用法と相通じる点がある。この中で注目すべきは、(3)の『大和物語』一七三段と、(4)の『平中物語』三十六段であろう。つまり、「荒れたる宿」に住む女、そこを通りかかる男がその女に關心を寄せるといふ出會いの構圖が「花櫻折る少將」と類似しており、物語の展開は異なるものの、これらの二つの歌物語が「花櫻折る少將」に何らかの影響を及ぼしていると思見しても差し支えないだろう。

(5) かくて、人憎からぬさまにて、十といひて一つ二つの年はあまりにけり。(中略)かかるところをも、とりつころひかかはる人もなければ、いと悪しくのみなりゆく。これをつれなく出で入りするは、ことに心細う思ふらむなど、深く思ひよらぬなめりなど、ちぐさに思ひみだる。ことしげしといふは、なにか、この荒れたる宿の蓬よりもしげげなりと、思ひながむるに、八月ばかりになりけり。

(『蜻蛉日記』・上巻・一八二～一八三頁) 17)

(6) 若君、かくて歎く夕ぐれに、風はげしく蟲の聲みだるゝを聞きて「あはれ、わが見しところの河原風、いかならん」と思ひやりて

風吹けば聲ふりたつる蟲の音に我も荒れたる宿をこそ思へ
など、眺めるたるほどに、十月斗になりぬ。

(『宇津保物語』・「俊蔭」・六十八頁) 18)

(7) 寄りて見るに、嚴めしき牡熊、牝熊、子を生みつれて、棲むうつほなりけり。出で走りて、この子を食まむとする時に、この子のいはく「しばし待ち給へ。まろが命絶ち給フな。まろは孝の子なり。親はらからもなく、使フ人もなくて、荒れたる家に唯ひとり住みて、まろが參る物にかゝり給へる母ヲ持ちたてまつれり。

(『宇津保物語』・「俊蔭」・七十九頁)

(8) 荒れたる家の蓬深く、葎はひたる庭に、月の隈なくあかく澄みのぼりて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間よりもり来る月。荒うはあらぬ風の音。

(『枕草子』・一本の二十五段) 19)

(9) かくて、のちもなほ間遠なり。月の明かき夜、うち臥して、「うらやましくも」などがめらるれば、宮に聞こゆ。

17) 『蜻蛉日記』の引用は、木村正中他校注・譯『土佐日記蜻蛉日記』(日本古典文學全集九、小學館、一九七三年三月)による。括弧内に巻數・頁數を記した。

18) 『宇津保物語』の引用は、河野多麻校注『宇津保物語一』(日本古典文學大系十、岩波書店、一九五九年十二月)による。

19) 『枕草子』の引用は、松尾聰・永井和子校注・譯『枕草子』(新編日本古典文學全集十八、小學館、一九九七年十一月)による。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと

(『和泉式部日記』・一〇三頁 20)

(5)~(9)までの用例のうち、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』における「荒れたる宿」とは、歌における用法と同じく「人の不在」を表すのに用いられているが、兼家や敦道親王といった男の訪れを待つしかない「待つ女」たちの作品であるだけに、『大和物語』十八段の用いられ方のように、男が久しく訪ねてこないため、物思いに耽っている女の心情を効果的に物語っている。平野美樹は、「荒れたる宿に繁る草木の深さはそこに住む人の物思いの深さとして取り上げられている」²¹⁾と指摘している。

また、(6)の『宇津保物語』「俊蔭」巻における「荒れたる宿」は、父俊蔭の死後一人「荒れたる宿」に住んでいる俊蔭の女と契りを結んだ兼雅の歌に用いられ、『大和物語』一七三段と『平中物語』三十六段と同じく、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」の圖式になっている。なお、(8)の『枕草子』一本の二十五段は、「物語に見える孤獨な姫君などの境遇の典型」(新全集、二九九頁の頭注)を描寫しているとも言われる一七一段を想起させる。ここにも、しっかりした後見のない姫君たちの境遇が下敷きになっていると思われる。

(三)『源氏物語』とそれ以降の「荒れたる～」の用例

では、『源氏物語』とそれ以降の作品における「荒れたる～」の用例を見てみよう。先ず、『源氏物語』²²⁾には、次のように十一例の用例が見られる。²³⁾

- (10) 「さて、その文の言葉は」と、問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや、
山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露
思ひ出でしままにまかりたりしかば、例の、うらもなきものから、いともの思ひ顔に
て、荒れたる家の露しげきをながめて、蟲の音に競へる氣色、昔物語めきておぼえは
べりし。
(「帚木」・一・一五八頁)
- (11) 歸り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥した

20) 『和泉式部日記』と『更級日記』の引用は、藤岡忠美他校注・譯『和泉式部日記紫式部日記更級日記讃岐典侍日記』(日本古典文學全集十八、小學館、一九七一年六月)による。

21) 平野美樹「『荒れたる宿』考—『蜻蛉日記』における『主觀的眞實』の背景—」(『中古文學』第六十三號、一九九九年五月)五頁。

22) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生他校注・譯『源氏物語一～六』(日本古典文學全集十二～十七、小學館、一九七〇年十一月～一九七六年二月)による。括弧内に巻名・巻數・頁數を記す。

23) また、わび住まいする姫君を満開の櫻の下で垣間見るという設定は、『源氏物語』「竹河」巻の、藏人少將が玉鬘の姫君たちを垣間見る場面(五・六十八～六十九頁)を思い出させる。「荒れたる宿」といった表現はないとしても、髭黒の没後不遇をかこつ姉妹の姿は、「荒れたる宿」の姫君とも言えよう。

り。「こはなぞ、あなもの狂ほしの物怖ぢや。**荒れたる所**は、狐などやうのもの、人をおびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。まろあれば、さやうのものにはおどされじ」とて、引き起こしたまふ。
(「夕顔」・一・二四〇頁)

(12) かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、**荒れたりし所**に棲みけん物の我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにもゆゆしくなん。
(「夕顔」・一・二六八頁)

(13) **秋の末**つ方、いともの心細くて嘆きたまふ。**月**のをかしき**夜**、忍びたる所に、からうじて思ひたちたまへるを、**時雨**めいてうちそそく。おはする所は六條京極わたりにて、内裏よりなれば、すこしほど遠き心地するに、**荒れたる家**の、木立いとものふりて、木暗く見えたるあり。
(「若紫」・一・三〇九～三一〇頁)

(14) 忌みなど過ぎて、京の殿になど聞きたまへば、ほど経て、みづからのどかなる**夜**おはしたり。いとすごげに**荒れたる所**の、人少ななるに、いかに幼き人おそろしからむと見ゆ。
(「若紫」・一・三一五頁)

(15) かの紫のゆかりたづねとりたまひて、そのうつくしみに心入りたまひて、六條わたりにだに、離れまさりたまふめれば、まして**荒れたる宿**は、あはれに思しおこたらずながら、ものうきぞわりなかりける。
(「末摘花」・一・三六三頁)

(16) 二十日の**月**さし出づるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き**橘**のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり。(中略)

人目なく**荒れたる宿**はたちばなの花こそ軒のつまとなりけれ

とばかりのたまへる、さはいへど人にはいとことなりけり、と思しくらべらる。

(「花散里」・二・一四八～一四九頁)

(17) **五月雨**つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。(中略)年ごろにいよいよ**荒れまさり**、すごげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。**月**おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ盡きもせず見えたまふ。(中略)**水鶏**のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにして**荒れたる宿**に**月**をいれまし

(「落標」・二・二八七～二八八頁)

(18) もとより**荒れたりし宮**の内、いとど狐の住み處になりて、うとましうけ遠き木立に、**梟**の聲を朝夕に耳馴らしつつ、(中略)かかるままに、**淺茅**は庭の面も見えず、しげき**蓬**は軒をあらそひて生ひのぼる。**葎**は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、

(「蓬生」・二・三一七、三一九頁)

(19) **卯月**ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、對の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの**雨**いますこしそそきて、をかしきほどに**月**さし出

でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづの事思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎたまふ。大きな松に藤の咲きかかりて、(中略)橋にはかはりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、亂れ伏したり。(中略)例ならず世づきたまひて、

亡き人を戀ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ

も心苦しきほどになむありける。 (「蓬生」・二・三三四～三三五頁)

- (20) 荒れたる所もなけれど、住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたるにほひなど、見はやす人もなきを見わたしたまひて、 (「初音」・三・一四九頁)

『源氏物語』における(10)～(20)までの「荒れたる～」の用例を検討してみると、「夕顔物語」(10～12の用例)、「紫の上物語」(13、14の用例)、「末摘花物語」(15、18～20)、「花散里物語」(16、17の用例)に用いられているのが分かる。

これらのうち、(11)と(12)の用例は、夕顔の住まいではなく、光源氏が連れて行った「ながしの院」を指しているが、(10)の「雨夜の品定」における「荒れたる家」の頭中將と関係のあった女を夕顔と見るならば、謎めいた「荒れたる所」の女君というイメージが付與されている彼女の死に場にはふさわしい所であったと思われる。

(13)と(14)は、北山の僧坊で出會った若紫と光源氏が再會する場面において用いられている用例であるが、ここの「荒れたる家」とは、紫の上の母方の祖父である故按察大納言の家である。この屋敷の荒廢ぶりは、「かしこには、今日しも、宮渡りたまへり。年ごろよりもこよなう荒れまきり、廣うもの古りたる所の、いと人少なにさびしければ」(「若紫」・一・三二二頁)という紫の上の父兵部卿宮の視線を通して描かれている。「紫の上物語」におけるこれらの用例は、光源氏との出會いの場面に用いられてはいないが、祖母の死後一人残された若紫と光源氏との本格的な関係が始まる時點に用いられているという點で、「荒れたる宿の姫君に戀する男君の物語」という圖式に符合しているように思われる。また、(16)と(17)の「花散里物語」における「荒れたる宿」とは、花散里の姉でありながら桐壺院の女御であった麗景殿女御の邸を指している。

次に、「末摘花物語」における用例であるが、『源氏物語』において「荒れたる宿の姫君」とは読み手に末摘花を連想させる程、その用例数が他の物語に比べて非常に多い。(20)の用例における「荒れたる所」は否定の形になっているが、昔と違って經濟的に困らない二條東院での末摘花の生活を語っているのに用いられ、「荒れたる宿」の姫君であった「昔」の末摘花を想起させることによって光源氏の「心長き」後見ぶりを強調しているのであろう。

「末摘花物語」における「荒れたる～」の表現は、(15)、(18)～(20)の用例だけではなく、次

の用例からも確認することができる。

- (a) うしろめたうかたじけなしと思へど、寢殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出だしてもものしたまふ。(中略)いといたう**荒れわたりて、さびしき所**に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなる事どももありけれなど、思ひつづけても、(「末摘花」・一・三四二～三四三頁)
- (b) 八月二十餘日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出でて、うち泣きなどしたまふ。(中略)月やうやう出でて、**荒れたる籬**のほどうとましく、うちながめたまふに、琴そそのかされて、ほのかに搔き鳴らしたまふほど、けしうはあらず。(「末摘花」・一・三五三～三五四頁)
- (c) かの物に襲はれしをり思し出でられて、**荒れたるさま**は劣らざるを、(中略)からうじて明けぬる氣色なれば、格子手づから上げたまひて、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると**荒れわたりて**、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、(中略)着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。(「末摘花」・一・三六五、三六七頁)
- (d) いとあはれにさびしく**荒れまどへる**に、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してもあはれなるを、かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、(中略)橘の木の埋もれたる、御隨身召して拂はせたまふ。(「末摘花」・一・三六八～三六九頁)

『源氏物語』における「末摘花物語」と「花櫻折る少將」との関わりについては、既に兩物語が同じく三段構成であるという点、作中人物の行爲・性格に一致する点があるという土岐武治の指摘²⁴⁾があるが、このような兩物語の類似は、単に「花櫻折る少將」が『源氏物語』『末摘花物語』の影響を受けたということに止まるのではなく、先行する作品において形成されてきた「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」というパターンがその下敷きになっていると言えよう。その際、(10)と(a)(c)における「昔物語」という表現は、注目すべきである。

このことについて平野美樹は、

24) 土岐武治『『花櫻折る少將』と源氏末摘花の巻との交渉』(『國文學』一九六一年十二月號 一〇六～一〇七頁)。

『源氏物語』の夕顔、紫上、末摘花、落葉宮、宇治大君・中君といった女性達が、男主人公と出會った時、あるいは出會う前の住まいが「荒れたる宿」して描かれている。中でも、(中略)二例(10とaの用例—筆者注)では、その場面が「昔物語」にあるようだと言われており、「荒れたる宿」という和歌の素材が、虚構的世界の中での一つの類型になっていったことが分かる。²⁵⁾

と述べているが、示唆的な論であると思われる。

「末摘花物語」の(d)における「かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし」という光源氏の心中思惟は、「雨夜の品定」で話題になった「さびしくあばれたらむ葎の門」の「思ひの外にらうたげならん人」(「帚木」・一・一三六頁)、すなわち「昔物語」に登場しそうな「荒れたる宿」の姫君への関心が、後の光源氏の戀に強く影響していることを示しているのであろう。

そして、『源氏物語』以降の『更級日記』『狭衣物語』『夜の寢覺』には、以下のような用例が見受けられるが、実際の描寫に過ぎず、「花櫻折る少將」との関わりはないようである。

- (21) ひろびろと**あれたる所**の、過ぎ來つる山々にも劣らず、大きにおそろしげなるみやま木どものやうにて、都のうちとも見えぬ所のさまなり。(『更級日記』・二九八頁)
- (22) その五月のついたちに、姉なる人、子うみてなくなりぬ。(中略)母などは皆なくなりたる方にあるに、形見にとまりたるをさなき人々を左右に臥せたるに、**あれたる板屋**のひまより月のもり來て、ちごの顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかきよせて、思ふぞいみじきや。
(『更級日記』・三〇九頁)
- (23) 宮の**荒れたる所々**繕はせなどせさせ給ひて、さるべき家司など別ちなさせ給ひつつ、故宮に候ひし人々、かたへは嵯峨の院・齋宮などに別れにし残りは、さながら寂しからぬ様にして候はせ給ふ。
(『狭衣物語』・卷三・十三頁²⁶⁾)
- (24) 一條殿の**あれたる所**修理し、はき清め、しつらひて、おぼつかなしと思きこゆる女房たち集まりてまち奉る。
(『夜の寢覺』・卷二・一三八頁²⁷⁾)

以上、「花櫻折る少將」に先行する作品(または、同時代と推定される作品)における「荒れたる～」の用例を検討してみた。これらの考察を通して、「荒れたる宿の姫君に戀する通り

25) 平野美樹、前掲論文、六頁。

26) 『狭衣物語』の引用は、松村博司・石川徹校註『狭衣物語下』(日本古典全書、朝日新聞社、一九六七年十二月)による。

27) 『夜の寢覺』の引用は、阪倉篤義校注『夜の寢覺』(日本古典文學大系七十八、岩波書店、一九六四年十二月)による。

がかりの男君の物語」というパターンは、現存する物語の中では『大和物語』一七三段、『平中物語』三十六段、『宇津保物語』「俊蔭」巻などにおいて形を整え、『源氏物語』作者の手によって「昔物語」の設定であるという認識のもとで意識的に取り入れられ完成された、物語における戀の一形態であると言えるのではないか。また、『源氏物語』以来の「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」は、次のような共通点を持っていることが分かる。すなわち、男君は美男子の色好みであるということ、女君はもともと出自が良かったが両親の死などによって今は後見のない零落した身の上であるということ、その姫君を男君が見つめ、戀するということがそれである。

従って、『堤中納言物語』における「花櫻折る少將」は、所謂「姫君掠奪譚」、「をこ譚」といった先行作品における話型だけを取り入れ形成された作品ではなく、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」という既にパターン化されていた男女の戀の形態を物語の中心に据え、形成された作品であると言えよう。しかし、このことが「花櫻折る少將」が先行する作品の模倣ということにはならないと思う。

次節においては、「荒れたる宿」に咲き亂れた「櫻」を通して、些細ながらも先行する作品との差別化を圖ったこの物語の作意、そしてそれによって果された物語内的な意味についても考えてみる。

二 春の月夜の「花櫻」

(一) 「花櫻折る」の二つの意味

先ず、この物語の題名に用いられている「花櫻折る」の意味について考えてみよう。物語の本文に「花櫻折る」という表現は用いられていない。ただ次の場面の歌において「花櫻」が一例用いられているのみである。

【場面Ⅱ】

隈なき月に、所どころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり。いますこし、過ぎて見つる所よりも、おもしろく、過ぎがたき心ちして、

そなたへと行きもやられず花櫻にほふとかけにたびたれつつ

とうち誦じて、「はや、ここにも言ひし人あり」と思ひ出でて、たちやすらふに、築地の崩れより、白きものいたう咳きつつ出づめり。あはれげに荒れ、人げなき所なれば、ここかしこのぞけど、咎むる人なし。

(二十一～二十二頁)

この場面は、今の戀人の家を夜中に出てしまった男君が他より櫻が「おもしろく」咲いて

いる、とある「荒れたる宿」の前に立ち盡くし、この家が他ならぬ昔の戀人の家であったことを思い出すところである。

ここにおける「そなたへと～」の歌について、集成の頭注では、「花櫻」を「櫻花」、すなわち広い意味での「櫻」と解している。このような見解は、既に「櫻の花を言う。『さくら花』と同じである」という山岸徳平の指摘²⁸⁾や、森口年光の論²⁹⁾からも見受けられる。「花櫻」に関してはこれらの指摘とは違って、「花櫻は櫻の一種、重瓣で花の色の紅なるもの³⁰⁾」といい、「花櫻」を「櫻」一般を指すものではなく、特定の一品種と見なす見解もある。

しかし、この物語において「櫻」を表す表現が、「花櫻」一例、「櫻」二例、「花」十例(ただし、二例は人のたとえ)となっているところを見ると、「荒れたる宿」の満開である「花櫻」を特定の品種と見る根拠は乏しく、たとえ特定の品種であるとしても「櫻」であることには變わりがない。要するに、「花櫻折る少將」において「花櫻」は「櫻」「花」と同じ意味として用いられていると見られ、これは「花櫻折る」=「櫻折る」=「花折る」という等式を可能にする。

この物語における「花櫻折る」の意味に関しては、三つの見解が出されている。男君の美しい容貌のたとえ、美人を手に入れるという意、両方の意味がそれである。

このことについて最初に言及したのは、池田龜鑑である。池田氏は、「花を折る」という論文において初めは「つきもし奉らば、うせもしつべき御顔つきにて、花を折りたるごとぞなりまさり給ふ」(『宇津保物語』・「藏開上」)、「女御の御もとに宮達つどひて御かたちは花を折りたるごとして」(『宇津保物語』・「國讓下」)、「いと清らに、櫻を折りたる様し給ひて」(『源氏物語』・「東屋」)などの用例から、「『花を折る』または『櫻を折る』という言葉は平安朝中期から末期にかけて、まず大體、容貌の美しいこと、容姿を美しくすることなどの意味に使われていたと解しても不都合ではない³¹⁾」と指摘した。しかし、氏は「『花を折る』補考³²⁾」において、横山由清舊藏の古寫本の標題が「はなををる少將」となっていることや、「花」「櫻」が美人のたとえ、「折る」が「掌中のものにする」のたとえとして用いられている用例などを分析した後、前の論を覆すとも取れる見解をも述べており、最終的には「花櫻折る」の二重の意味を認める立場であるように受け取られる。その後、池田氏の論を参考にしながら、前者を取る説³³⁾、後者を取る説³⁴⁾、両方を取る説³⁵⁾が成されているのである。

28) 山岸徳平『堤中納言物語全註解』(有精堂、一九六二年十一月)一九三頁。

29) 森口年光『堤中納言物語の『花櫻(を)折る少將』名義考』(『中央大學國文』第六號、一九六三年三月)二十三頁。

30) 土岐武治『堤中納言物語新釋』(學而堂、一九五四年六月)六十四頁。

31) 池田龜鑑『物語文學Ⅱ』(至文堂、一九六八年十月)五五六～五五七頁。初出は、『帝國大學新聞』六二一、一九三六年四月。

32) 池田龜鑑、上掲書、五六二頁。初出は、『國語と國文學』一九三七年一月號。

33) 例えば、三谷榮一『堤中納言物語とりかへばや物語』(鑑賞日本古典文學第十二卷、角川書店、一九七六年十二月)における解説(三十八～三十九頁)など。が、三谷氏も、池田氏のように両方説を仄めかしている。

要するに、「花櫻折る」を「男君の美しい容貌」のたとえとして見るか、「美人を手に入れる」という意として見るかの問題であるが、本文に即して見る限り、前者の意味として用いられているように読み取られる。つまり、この物語において男君は、「いはむかたなく光みちて、花のにはほひも、無下にけおさるる心ちぞする」御かたち(二十六頁)、「限りなき女も、かくはえあらじと見ゆ」る御手つき(二十七頁)の持ち主として語られている。花の匂いさえ氣壓される、女にも勝る、光り輝く男君のこのような限りない美貌は、「物語の典型的な男性」像(集成、二十頁の解説)として、『源氏物語』において光源氏の容姿に用いられている「女にて見たてまつらまほし」(「帚木」・一・一三七頁)という表現とも通じるものであろう。また、【場面Ⅱ】に語られているように、今の戀人、昔の戀人の存在を仄めかしつつ、「荒れたる宿」の姫君に關心を寄せる男君の姿は、「色好みの主人公の姿を、讀者にとりあえず示」³⁶⁾していると思うが、このように優れた美貌の色好みこそ、「花櫻折る」男君の典型であろう。

次に、後者のことであるが、この物語において女性を指す表現として用いられている二例の「花」、すなわち「かの花」(二十八頁)、「花」(二十九頁)が「荒れたる宿の姫君」を指すのではなく、男君の側近である光季が通っている「童」を指していることは、本文の表現からは「花櫻折る」=「美人を手に入れる」という等式が成り立たないことを意味する。しかし、この物語の結末が、姫君を手に入れようとしたが、拉致の失敗で終わっているということや、三谷榮一の「一般に平安朝物語は、作品中で用いられている和歌や主人公の行爲、あるいは主題を象徴する言葉で題名をつけるのが普通」³⁷⁾であるという見解などを合わせて考えてみると、「花櫻折る」には「姫君を手に入れる」という意味もまた含まれているように読み取られる。

要するに、「花櫻折る少將」という題名は、本文の表現と作品全體の内容を見たとき、「華麗な容姿」の少將が「美しい姫君を手に入れる」物語であることを表していると思われるが、「この物語は短篇十章より成り、文章勁拔、構想また奇警なるもの」³⁸⁾という評価は、このように題名から読み手の興味を引きつけ、読み手の豫想に反する展開を見せる点にも

34) 例えば、土岐武治「堤中納言『花櫻折る少將』題名考」(『國語國文』一九五六年八月號)、森口年光の前掲論文、塚原鐵雄の集成の解説など。

35) 例えば、講談社學術文庫の三角洋一の解説(十六頁)、増田夏彦『『堤中納言物語』についての一考察—『花櫻折る少將』の問題点をめぐって—』(『岡大國文論稿』第十五號、一九八七年三月)など。

36) 玉上琢彌「昔物語の構成」(『源氏物語研究』、源氏物語評釋別卷一、角川書店、一九六六年三月)一一八頁。初出は、『國語國文』一九四三年六・八・九月號。

37) 三谷榮一、前掲書、三十九頁。しかし、三谷氏は續けて「ところがこの作品は、物語を讀めばわかるように、『花櫻折る』という主人公の姿が、後にどんでん返しをくらうところに面白さがある」と述べている。

38) 藤岡作太郎『國文學全史2平安朝篇』(平凡社、一九七四年二月)二八二頁。初出は、東京開成館、一九〇五年九月。

よるものであろう。

(二)「荒れたる宿」に「櫻」という効果装置

さて、この物語の書き手が姫君を「花櫻」「櫻」「花」などに一度もたとえることなく、読み手に「姫君」=「花櫻」(「櫻」「花」というイメージを與えることができたのは、「櫻」の持つ象徴性によるところが大きい。つまり、先行する作品において形作られた「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」を下敷きにしつつも、それらの作品と一線を畫しこの物語なりの獨自性を成し遂げたのには、「荒れたる宿」の満開である「櫻」、その組み合わせが要因の一つになっていると思われる。「荒れたる宿」と「櫻」の結合こそ、ぎりぎりの線においてこの物語を先行する作品の模倣に終らせないポイントになっているのであろう。

というのは、先行する作品の「荒れたる～」の場面における季節と植物などの情景描寫を見ると、「荒れたる宿」に「櫻」という組み合わせは一例もないからである。「花櫻折る少將」における男君と姫君との出會いの場面は、【場面Ⅱ】に語られている通り、空と「まがひぬべく」櫻が咲きこぼれた「隈なき」月夜であることが分かる。つまり、「春、月夜、櫻」がその舞臺装置のキーワードになるわけであるが、一節において検討した先行する作品(もともと、成立年代の不明や参考のための対象外の作品も入っている)においてはどうか。傍線で記したところが「荒れたる～」の季節や風物にあたる。

まず、引用①～⑯の歌における用例を検討してみる。これらの用例のうち、季節やその情景が確認できるのは、③の「女郎花」「秋」、④の「紅葉」「冬」、⑤の「春」、⑥の「月夜」「秋」、⑦の「浅茅生」「うづら」「秋の夕暮」、⑧⑨の「月夜」、⑩の「浅茅原」、⑪の「月」、⑫の「初雪」「冬」、⑭の「月夜」、⑮の「すみれ」、⑯の「苔」である。

季節は、夏を除き、「春」「秋」「冬」が揃っており、「月夜」が目立っている。また、景物としては、「雪」「うづら」もあるが、「女郎花」「紅葉」「浅茅」「すみれ」「苔」といった植物系が「荒れたる宿」を際立たせていることが分かる。

次に、(1)～(24)、(a)～(d)の散文学における用例を検討してみると、(1)の「葎」、(3)の「雨」「梅」「鶯」「蓬」、(4)の「秋」「蓬」、(5)の「蓬」「八月」、(6)の「風」「蟲の聲」「十月」、(6)(7)の「荒れたる宿」の根據になる『宇津保物語』中の「夏」「蓬葎」「秋」「秋風」「蟲の聲」「月」「浅茅生」「薄」、(8)の「蓬」「葎」「月」「風の音」、(9)の「月夜」、(10)の「撫子」「蟲の音」、(13)の「秋」「月夜」「時雨」、(16)の「月」「橘」、(17)の「五月雨」「月」「水鶏」、(18)の「梟の聲」「浅茅」「蓬」「葎」、(19)の「卯月」「雨」「月夜」「松」「藤」「柳」、(20)の「紅梅」、(22)の「五月」「月」、(a)の「梅」、(b)の「八月」「月」「星」「松」「風の音」、(c)の「雪」、(d)の「松の雪」「葎」「橘の木」などとなっている。

季節は四季が全部揃っており、雨の日にも月が出るほど、「月夜」が重要な背景になっている。また、「鶯」「水鶏」「梟の聲」「星」「雪」「風の音」「蟲の音(聲)」などもあるが、歌と同じ

く「葎」「蓬」「梅・紅梅」「橘」「松」「薄」「淺茅(生)」「藤」「柳」「撫子」などの植物が多く見受けられる。つまり、「荒れたる宿」と「櫻」の組み合わせは一例もないのである。「花櫻折る少將」と同じく「春」を背景にしても、(3)と(a)(20)から分かる通り、「梅」「紅梅」となっているのである。

これらの用例の検討から、先行研究において多く指摘されている、「透垣のつらなるむら薄の繁き」(二十三頁)という表現の持つ意味も理解できよう。つまり、「荒れたる宿」の寂しい風景の描寫に用いられた「秋の薄」が、先行する作品の名残として「櫻が満開である春」の風景に残存しているのであり、物語において「荒廢の狀況」(集成の頭注)をより際立たせる装置になっているのであろう。

さて、『枕草子』三十五段に「木の花は濃きも薄きも、紅梅。櫻は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる」とあるほど、平安時代の春の花を代表しているのは、「梅」と「櫻」である。「梅」と「櫻」について山田孝雄³⁹⁾は、梅は奈良朝、櫻は平安朝を代表する花のように述べているが、『源氏物語』の用例(「梅」四十四例、「櫻」五十一例)などを見れば、「梅」より「櫻」の方がより多く用いられてはいるものの、「梅」と「櫻」は両方春を代表する花として平安時代の人々に愛でられていたことが分かる。

このように「花櫻折る少將」以前の作品においては、恐らく華麗なあまり妖艶さまで漂わせる櫻のイメージとのずれのために「荒れたる宿」の景物として取り入れられなかった「櫻」が、「花櫻折る少將」において寂しいイメージの「荒れたる宿」に美しい「櫻」という發想の轉換を見せているのである。

この物語における櫻について、井上新子は「物語にちりばめられた櫻は、華やぎと一方では衰えを伝える。姫君掠奪譚の本筋に直接関わりがないと考えられる物語中間部に、それらのイメージが配されていることは重要だろう。兩義の櫻は、結末の、若い姫君から老いた尼君への取り違えをシンボライズしているのではないか⁴⁰⁾と述べている。「華やぎ」と「衰え」という「櫻の兩義性」と結末部分の「若い姫君から老いた尼君への取り違え」が重なっているという井上氏の指摘は、大變興味深い。

しかし、この物語の讀みにおいて看過できないのは、「荒れたる宿」と「櫻」というイメージのずれを積極的に逆利用した物語の試みであると思われる。つまり、満開の時と散る時において櫻が異なるイメージを持っているのは否定できず、また井上氏の指摘のように物語中間部において散る櫻に関する登場人物たちのやりとりが語られているのは事實である。が、それは結末において戯畫化された「祖母上」に重なるような「衰え」だけの散る櫻のイメージではなく、「暮れゆくほどの空、いたう霞みこめて、花のいととおもしろく散

39) 山田孝雄『櫻史』(櫻書房、一九四一年五月)二十九頁。

40) 井上新子『花櫻折る少將』の語りと引用一物語にみる<幻想>一、『國文學攷』第一四七號、一九九五年九月)二十七頁。

りみだるる夕ばえ」(二十六頁)から読み取れるように、むしろ満開の時の美しさとは一味違う、夕暮の風景に溶け込まれより風情のある、散る櫻の「美しさ」のイメージなのである。そして、そのような「櫻」のイメージによって増幅されてきた美しい「姫君」への期待が結末の「祖母上」の登場という事態に直面し、一瞬急降下しているのである。

結局、先行する作品においては「荒れたる宿」のイメージとのずれによって「荒れたる宿」の姫君と通りかかる男君との出逢いの場面において重要な景物として用いられなかった「櫻」が、「花櫻折る少將」においては宿の寂しさを強調する風景の描寫と矛盾しつつも物語の中心題材として用いられるようになったのは、結末の反轉をより強烈に読み手に印象づけるための効果装置の機能を持っていたからだと思われる。つまり、妖艶で華麗な「櫻」のイメージに重ね合わせられ作られていた「姫君」のイメージと現實に手に入れた「祖母上」との落差によって読み手の意表を突く手法が、この物語の「櫻」には託されていると思われる。さらに、そのような作意は「明」のイメージの「櫻」と對比されることによって、「荒れたる宿」の「暗」のイメージが浮き彫りにされ、より強く読み手に伝わっていると言えよう。これらこそ、先行する作品と一線を畫する「花櫻折る少將」の試みであり到達点であったのではないか。

おわりに

以上、『堤中納言物語』『花櫻折る少將』における「荒れたる宿」という表現に着目し、それ以前の作品(または同時代と推定される作品)におけるその用いられ方を検討し、それがこの物語にどのように受容されているのかについて確認してみた。なお、先行する作品と緊密な関わりを持ちながらも、それらと辯別されるこの物語の新しさを、「荒れたる宿」に咲き亂れた「花櫻」に着目して考えてみた。

考察の結果、「花櫻折る少將」に見られる「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」というパターンは、現存する物語の中では『大和物語』一七三段、『平中物語』三十六段、『宇津保物語』『俊蔭』卷などにおいて形を整え、『源氏物語』作者の手によって「昔物語」の設定であるという認識のもとで意識的に取り入れられ完成された、物語における戀の一形態であると言えよう。従って、『堤中納言物語』における「花櫻折る少將」は、所謂「姫君掠奪譚」、「をこ譚」といった先行作品における話型だけを取り入れ形成された作品ではなく、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」という既にパターン化されていた男女の戀の形態を物語の中心に据え、形成された作品であると言えよう。

そして、先行する作品においては「荒れたる宿」のイメージとのずれによって「荒れたる宿」の姫君と通りかかる男君との出逢いの場面において重要な景物として用いられなかつ

た「櫻」が、「花櫻折る少將」においては宿の寂しさを強調する風景の描寫と矛盾しつつも物語の中心題材として用いられるようになったのは、結末の反轉をより強烈に読み手に印象づけるための効果装置であったと思われる。このような試みこそ、「花櫻折る少將」が先行する作品の模倣にならず、それらと一線を畫し、自分なりの作品性を獲得した要因であると思われる。

【参考文献】

- ・ 稻賀敬二他校注・譯(1972)『落窪物語堤中納言物語』小學館 425頁
- ・ 塚原鐵雄校注(1983)『堤中納言物語』新潮社, 20頁
- ・ 土岐武治(1954)『堤中納言物語新釋』學而堂 64頁
- ・ 三角洋一(1981)『堤中納言物語全譯注』講談社, 38頁
- ・ 山岸徳平(1962)『堤中納言物語全註解』有精堂, 193頁

- ・ 池田龜鑑(1968)『物語文學Ⅱ』至文堂 556~557頁
- ・ 塚原鐵雄(1971)『王朝の文學と方法』風間書房 110~112頁
- ・ 山田孝雄(1941)『櫻史』櫻書房, 29頁

- ・ 阿部好臣(1998)「引用のモザイクからの挑戦—花櫻折る少將と王權物語—」『堤中納言物語の視界』新典社, 293頁
- ・ 井上新子(1995)「『花櫻折る少將』の語りと引用—物語にみる<幻想>—」『國文學攷』147, 27頁
- ・ 土岐武治(1956)「堤中納言『花櫻折る少將』題名考」『國語國文』1956年8月號
- ・ 土岐武治(1961)「『花櫻折る少將』と源氏末摘花の卷との交渉」『國文學』1961年12月號、學燈社, 106~107頁
- ・ 平野美樹(1999)「『荒れたる宿』考—『蜻蛉日記』における『主觀的眞實』の背景—」『中古文學』63, 中古文學會 5頁
- ・ 森口年光(1963)「堤中納言物語の『花櫻(を)折る少將』名義考」『中央大學國文』6, 23頁

要 旨

『堤中納言物語』に収録されている十篇の短篇物語のうち、「花櫻折る少將」は『源氏物語』を始めとしてその他『伊勢物語』『落窪物語』などの先行する作品との関わりが多く指摘されている物語である。「花櫻折る少將」に関する先行研究を検討してみると、主にこの物語を構成する話型、すなわち「姫君掠奪譚」「をこ譚」をもってその受容関係を指摘する論が多いように思われる。しかし、「花櫻折る少將」には、これらの指摘の他に、「昔物語」の傳統に基づく、男女の戀の一形態、典型的な一つのパターンを読み取ることができると思われる。

そこで、本稿では、「花櫻折る少將」以前の作品(または同時代と推定される作品)における「荒れたる宿」の用いられ方を検討し、それがこの物語にどのように受容されているのかについて確認した後、それらの先行する作品と辯別されるこの物語の新しさを、「荒れたる宿」に咲き亂れた「花櫻」に着目して考えてみた。

考察の結果、「荒れたる宿の姫君に戀する通りがかりの男君の物語」というパターンは、現存する物語の中では『大和物語』一七三段、『平中物語』三十六段、『宇津保物語』『俊蔭』巻などにおいて形を整え、『源氏物語』作者の手によって「昔物語」の設定であるという認識のもとで意識的に取り入れられ完成された、物語における戀の一形態であることが分かった。しかし、このことが「花櫻折る少將」が先行する作品の模倣ということにはならないと思う。なぜなら、先行する作品の「荒れたる～」の場面における季節と植物などの情景描寫を見ると、「荒れたる宿」に「櫻」という組み合わせは一例もないからである。つまり、この物語は「荒れたる宿」に咲き亂れた「櫻」を通して、些細ながらも先行する作品との差別化を圖っているのである。

結局、先行する作品においては「荒れたる宿」のイメージとのずれによって「荒れたる宿」の姫君と通りかかる男君との出逢いの場面において重要な景物として用いられなかった「櫻」が、「花櫻折る少將」においては宿の寂しさを強調する風景の描寫と矛盾しつつも物語の中心題材として用いられるようになったのは、結末の反轉をより強烈に読み手に印象づけるための効果装置の機能を持っていたからだと思われる。つまり、妖艷で華麗な「櫻」のイメージに重ね合わせられ作られていた「姫君」のイメージと現實に手に入れた「祖母上」との落差によって読み手の意表を突く手法が、この物語の「櫻」には託されていると思われる。この點こそ、先行する作品と一線を畫する「花櫻折る少將」の試みであり到達點であったと思われる。

キーワード：堤中納言物語、花櫻折る、荒れたる宿、花櫻、昔物語、傳統と創作

투 고 : 2003. 11. 26

2차 심사 : 2003. 12. 19

3차 심사 : 2004. 1. 8

住 所 : (138-041) 서울市 松坡區 風納1洞 510 新星APT 102-903號

電 話 : 02-487-7716

E-mail : mslee82@hanmail.net